

## 教育カウンセリング場面における循環

平 宮 正 志

On Circulation in the field of Educational Counseling

Masashi HIRAMIYA

The paper is on circulation in the field of educational counseling through “countertransference” and “cognitive therapy” and “family therapy” and “Jomon’s thought”, and is about the importance of “awareness” and “will” and “Japanese tenderness” for cutting (avoiding) the vicious circle. I reached the conclusion that the thought on circulation in the field of educational counseling is useful.

**Keywords:** educational counseling; circulation; countertransference; cognitive therapy; family therapy; Jomon’s thought; awareness; will; Japanese tenderness

本論文は、教育カウンセリング場面における循環を、「逆転移」「認知療法」「家族療法」「縄文思潮」を通して論じると同時に、悪循環を断ち切る（回避する）ものとしての「気づき」「意志」「日本的なやさしさ」の重要性について述べたものである。結論として、教育カウンセリング場面における循環思考そのものが、有用であると考えられた。

## I. はじめに

陸上や海洋など、様々な場所で発生した物質の循環は、さらなる広範囲での物質の循環として、地球規模で統合されていく。野崎（1994）によれば、地球上の炭素は炭、黒鉛、ダイヤモンドなどの単体（炭素のみからなる物質）のみならず、様々な化合物として広く自然界に分布している。そして時間の経過と共に、大気中の二酸化炭素、有機物や炭酸カルシウム、さらには海水に溶けて重炭酸イオンなど、多種多様な物質へと変化している。このように炭素は様々な形態をしながら循環しているが、自然界を舞台に巡回しているものは、何も炭素ばかりではない。チッ素やミネラルなども、炭素同様、この地球上で循環している（堤、1973）。

その他、自然界で循環しているものの例としては、エネルギーや水などがある。渡辺（1971）によれば、エネルギー保存の法則とは「自然界に存在する様々な力が、相互に一定の関係で転換し、しかも全体として創出されることも消失されることもなく、一定量に保持されている」というものであり、エネルギー自体の循環を表現した法則ととらえることができる。また地球上の水も、雲・雨・氷・水蒸気など、様々な形態をしながら循環している。すなわち、われわれが暮らすこの地球では、様々な物質やエネルギーが、独自の形態をしながら循環している。

今回この自然界における循環システムをヒントに、様々な心理療法における理論や概念を、教育カウンセリング場面における循環として振り返ってみた。なお循環を特に意識した理由としては、①循環というシステムの中でカウンセリング場面を振り返ることにより全体像がより把握しやすくなること、②経過に応じてのストラテジーが立てやすくなること等をあげることができる。

## II. 教育カウンセリング場面における循環例

### 1. 意識の循環（面接場面における循環）

自身の臨床体験として Searles（1959）は、分裂病（統合失調症）を当人の養育上

きわめて重要だった単数あるいは複数の人物が、長期間にわたり当人を狂気へと導いた努力の結果であると述べている。視点を変えれば、これは個人にとっての家族の影響の大きさを指摘したものであると同時に、カウンセリングに当てはめた場合、未熟なカウンセラーはクライアントを援助するというよりもむしろ、逆に追い詰めるケースがありうることを示唆したものである。

一般に、二者間におけるカウンセリング関係は、治療者と患者の転移関係の中で発展・修復されてゆく。すなわち治療者は、患者の“回復したい”という意識と同化すると同時に、患者の自我・超自我・イドとも同調する傾向にある。いわゆる二者間の共生関係が、そこに形成される。それと同時に、自身の持っている患者の人格統合、すなわち患者がより健康で成熟した人となることを助けたいという、医療従事者が本来持つべき使命感をも循環させる。

ただこの時点で、治療者として自覚されない治療者自身の無意識、すなわち患者を手放したくない、症状を長引かせたい、だめにしてしまいたい等の、本来治療には不必要な、それどころか患者本人を悪化へ追い込むような無意識をも循環させるケースがありうることを Searles (1959) は指摘している。ここで患者を手放したくないという言葉を用いたが、これは言葉を変えれば、治療者自身も毒をもちうる可能性があるということ、すなわち精神病治療の際に、患者に転移が生じるという臨床的事実を認める限り、論理的に治療者の側より患者への転移（逆転移）があるということでもある。

Searles の記述をもとに意識の循環について述べてきたが、これは何も精神医学の範囲にとどまるものではない。國分久子 (2004) が、カウンセラー自身が対抗感情転移（逆転移）に気をつけるよう指摘しているように、逆転移は教育カウンセリング場面においても起こりうることであり、カウンセラーはクライアントの意識を受け止めると同時に、それにどう返答していくか常に注意を払わなければならない。そのような観点からも、スーパービジョン、教育分析、構成的グループエンカウンター等を通して、常に自己分析・自己理解する機会がカウンセラーには求められる。それはカウンセラー自身のためというよりもむしろ、カウンセラーが関わる多くの

人々のためのものである。

## 2. 思考の循環（個人内部における循環）

認知療法においては、ある状況である種の感情と一緒に瞬間的に浮かんでくる思考やイメージのことを自動思考と呼んでいる。こうした自動思考には、適応的なものと非適応的なものがあり、適応的なものは多次的に物事を見ることができるが、うつ傾向の人達においては大抵事実とずれている。その場合、それが気分や行動に影響し、いわゆるうつ症状が出現すると同時に、悲観的な思考が強くなればなるほど症状は悪化する（大野，1990）。これは、先に述べた Searles の面接場面における意識の循環というよりむしろ、個人の内部で発生している思考の循環で、連鎖が解消されない限り継続的に行われる営みでもある。

この連鎖を断ち切ろうとする試みが認知療法であるが、小谷津（2004）は実際の認知療法の技法として、7つのコラム法、分離外在化法、逆転の発想にもとづく教育的技法の3つの技法を述べている。また小谷津（2004）は「①過度の一般化」など、抑うつ患者特有の10の誤った思考についても述べているが、これらも児童・生徒・保護者・同僚などの思考の片寄りに気づくための知識として、極めて有用なものと考えられる。

なお國分・片野（2001）は、論理療法を構成的グループエンカウターのリーダーが学んで欲しいカウンセリング理論の一つとしてあげているが、著者自身、認知療法についても同様のことを考える。その理由は、リーダー自身が非適応的な思考や気分、そして行動に陥らないための予防になると同時に、メンバー理解のきっかけになるからでもある。

さらに「うつ」と「引きこもり」に関する知識や対処法については、学校現場に従事するカウンセラーにとって、近年の学校現場の実情から考え、避けて通れない事項でもある。その理由は、子どものうつ病の有病率が児童期で0.5～2.5%、思春期・青年期で2.0～8.0%であるという、傳田（2002）の報告等にもよるが、仮にそれらの傾向を示す児童生徒が現在いなくとも、将来そのような傾向のある人々に出

会う可能性が全くないとは言えないからでもある。いわゆる備えあれば憂いなしの予防的視点からだが、現在のような人口移動の激しい時代においては十分その可能性が考えられ、認知療法自体、学校現場で極めて有効に活用されていくものと考えられる。

### 3. システムの循環

Haley (1976) によれば、従来の児童相談運動は4つの段階に分類できるが、その第4段階目がシステム論、すなわち家族成員の行動は、それぞれ決められた連鎖を維持していくのに役立っているとするものである。このようなシステム論では、あるシステムが循環的に変化するものと考え、正常に動いていないシステムを正常なシステムに移すことを治療目標に定めている。

なおこのシステム論は、家族のみに限定されるものではない。教育現場に従事する教師やカウンセラー等が、学級集団を扱うような場合にも応用できる。具体的な取り組みの例としては、学級が正常に機能していない場合における教師主導の席替えや、新たな学級行事の企画・運営、構成的グループエンカウンターを活用しての人間関係づくりなどがあげられる。

さらに家族療法への理解の推進は、保護者との連携を構築するためにも極めて有効なことである。ここで家族との関わりの重要性について述べるならば、AD／HDへの対応（渡辺，2004）として、いじめへの対応（能重，1985）として、不登校への対応（千葉・渡辺，2004 有門，1999）として、さらには加勇田（2004）が述べているように、親との信頼関係づくりや保護者集団を育てるという観点からも重要であろう。

このように学校教育は、学校システムから家庭を切り離し学校独自で行われるものでなく、常に家庭との連携の上に成り立っている。そのような視点からも、家族療法を含め、家族・親子関係に関する研修・取り組みが、今後教育現場に立つ教師やカウンセラーには特に求められるのではなかろうか。

#### 4. 縄文思潮における循環（アニミズム、「円の発想」）

神道や仏教を心理療法に含めてよいかどうかについては様々な見解が考えられるが、今回の記述は、安藤（2003）が述べているように、特定の信仰や宗派を切り離してのものであり宗教を意識してのものではない。というよりもむしろ、日本人本来のアイデンティティを考慮してのものである。

記述の内容は、梅原（1996）等を参考に、日本人の思想・哲学の基盤を、仏教伝来以前の縄文文化に求めようとするものである。なお梅原自身、アイヌや沖縄の信仰の中に、縄文以来の二つの原理を見出している。その一つが、「人間と他の動物はいずれもこの地球の平等な住民であり、人間が他の動物にまさった優越的原理をなんら所有していない」という原理であり、もう一つが、「すべての生きとし生けるものは永遠にその魂が生と死を循環する」という原理である。すなわち太陽や月が循環しているように、この世界にある全てのものは、生から死、死から生へと永遠の旅を続けており、人間もまた他の生き物同様、そのような生死を繰り返しているというのである。

そしてこのような縄文思潮はまた、その後の仏教思想へと受け継がれていく。梅原（1996）によれば、その一つが、天台宗と真言密教が融合し「山川草木悉皆成仏」という言葉で表現される「天台本覚論」という思想であり、もう一つが親鸞による「往相廻向」「廻相廻向」の説である。ちなみに「山川草木悉皆成仏」とは、山や川や草や木が残らず仏になる性質を持っているというものであり、もう一方の「往相廻向」「廻相廻向」とは、「南無阿弥陀仏」を唱えれば人は全て極楽浄土へ行くことができ、そして再びこの世へ帰ってくることができるというものである。ここには、エドワード・タイラーが提唱したアニミズムや、武光（2003, 2004）が述べる「円の発想」が生きている。

ちなみにアニミズムとは、精霊信仰と訳される原始宗教の一つで、人間だけでなく動植物や無生物のすべてが、それ自身のたましい（魂，靈魂，精霊，アニマ）を所有しているとする、古代の人々の信仰を指しての言葉である（岩田，1993）。なお呉（2001）は日本特有のアニミズムのことを、その他の生け贄等を伴うアニミズ

ムと区別するためソフトアニミズムと表現している。

また「円の発想」とは、全てのものは平等という発想のもと、縄文人が図形的に偏りのない円形を好み（円形に並べた住居集落、同心円状の縄文土器など）、また共有財産制（身分の上下、貧富の差がない）のもと、人々が平等な立場で仲良く暮らそうとした縄文時代の思潮体系について述べたものである（武光，2003，2004）。そのような縄文人の発想のもとでは、戦争もなかった。ちなみの日本に戦争がもたらされたのは、弥生時代以降であるらしい（戸沢，2002）。それ以前の日本人は、アニミズムや「円の発想」のもと、この世におけるありとあらゆるものが平等な立場で生を営んでいたであろう。

なおこれらの縄文思潮を、教育哲学の観点（國分康孝，2004）からとらえた場合、プラグマティズムや論理実証主義等に相応するとは思われないが、これらの縄文思潮が人々の幸福に貢献するようであれば、教師やカウンセラーは進んで活用すればよいのではなかろうか。それは著者の「人を救ってこそその教師・カウンセラー」という思い（なおアルバート・エリスは「われわれ臨床家は人に安心立命を与える仕事だ。ぼく個人は無神論者だが、人を救うのに役立つことは何でもすればよいと思う」と語っている（國分康孝，2004））と同時に、日本人には日本人の思想・哲学に添ってのカウンセリング活動、そして世界にはまだまだ科学では解明されていない事項が多数あり、将来においても、全ての人々が、科学の力のみによって幸福に導かれるとは思われないからでもある。その根拠は、「科学の進歩が人間的な弱さを無視して、人間が人間的なあり方で生活することを困難にしている」という加藤（2002）の指摘を待つまでもなく、アイヌや沖縄の人々をはじめとする、慣れ親しんだ民族習慣を変更せざるおえなくなった、数多くの日本人の暮らしの中に見出せることでもある（野田，1996）。

さらに、これらの縄文思潮を教育の視点からとらえた場合、これら日本人の普遍的無意識へも繋がるであろう世界観は、道徳教育の中で取り上げられるべき題材でもある。その理由は、平成16年改訂の小学校学習指導要領の「道徳の時間」のねらいの中にある。ちなみに「道徳の時間」のねらいとは（1）主として自分自身に関

すること、(2) 主として他の人とのかかわりに関すること、(3) 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、(4) 主として集団や社会とのかかわりに関することの4点である(文部科学省, 2004)が、自然と共に歩んだ縄文の人々への理解の推進は、(3)の主として自然や崇高なものとのかかわりに関することに繋がる取り組みと考えられる。

### III. 悪循環を断ち切る

ある児童・生徒、またはそのシステム自体が悪循環に陥っている場合、教師やカウンセラーはその循環を断ち切る(回避する)よう努力しなければならない。その時、ポイントになると思われる概念が、気づきと意志、そして日本的なやさしさである。

カウンセリング理論の中で、特に気づきを重視するものとしては、精神分析、ゲシュタルト療法、交流分析、内観法などがある。また気づきの後の、その連鎖を断ち切る(回避する)意志の力として、ここでは実存主義的アプローチ、ジェラットの意思決定理論、アドラー心理学を取り上げてみたい。

#### 1. 気づき

自身が何らかの悪循環に陥っている場合、それはどんな悪循環であり、それによって自身がどのような状況に陥っているか、先ずはその悪循環に気づかなければならない。例えば、児童生徒がいつの間にか不良グループに誘われ、その世界が当たり前だと思い込んでいるケースや、子どもの世界、そして世間全般が変化しているにもかかわらず、従来の指導方針に固執する教師や親などがこれに相当する。そこでは、今自身が陥っている思考やシステムに対して、何の疑いもなく、それを堅持しようとする強固な意識が働いている。それはある意味、変化への抵抗であると同時に、無意識に積み上げられた積年の悪癖と言えるかもしれない。

ゲシュタルト療法では、気づきを極めて尊重している。安藤(2003)によれば、



ゲシュタルト療法ではクライアントの気づきを深めていくことが何よりも重要であり、治療者の努力は絶えず気づきを引き出すことに注がれる。そのため、従来の心理療法では考えられもしなかったような介入が、様々な形でなされていく。また交流分析では、人が自律的（脚本から自由になること）になることを理想とし、そのための方法として、自身の脚本に気づき、自己をコントロールすることを学習する（杉田、2004）。また内観法でも、今まで忘れていた、あるいは気づいていかなかった自分の多くの罪、過失への意識化を人々に求めている（吉本、1965）。なお國分（1980）はその著作において、ゲシュタルト療法の枠組みで内観法をとらえているが、そこには二つの理論の気づきを通しての共通性を見出すことができる。

このように精神分析、ゲシュタルト療法、交流分析、内観法では、気づき自体を極めて重視している。すなわち、これらの理論の視点に立つならば、気づきは悪循環を断ち切る（回避する）第一歩であると同時に、各循環に気づくこと自体に教育的・臨床的な意味があるものと考えられる。

## 2. 意 志

続いて、意志について述べたい。意志の力を取り上げる理由は、気づきだけでは回避できないようなケースが、教育場面では多々あるからである。例としては、金銭等をいじめっ子に渡し続けるケースがある。いわゆる、いじめである。これなど、脅しによる悪循環が続くケースであるが、もし本人が親や学校や警察等に訴えるだけの意志の力があれば、改善可能なケースでもある。また岸（2004）は、発達への意志の関わりの重要性について述べているが、これなども悪循環を断ち切る（回避する）ものとしての意志の力の重要性を説いたものと受け止められる。そういった観点からも、悪循環を断ち切る（回避する）ための意志の働きは見逃せない。ここではその意志の力について、実存主義的アプローチ、ジェラットの意思決定理論、アドラー心理学を通して記述する。

実存主義的アプローチにおける「体験的アプローチ」では、生身の体ごとの体験を重視する。すなわち身体感覚に気づき、それに従うことで、人は初めて自分を取

り戻せると考える。先に述べたゲシュタルト療法のパールズなども、この立場に立つ人である。ただそれには、自身の孤独を引き受けるだけの勇気が必要となってくる（諸富，2001）。すなわち、人それぞれ顔かたちが違うように気づきも異なり、自分自身に正直に生きようとすれば、そこでは必然的に他者とぶつかる機会が生じてくる。ただ先に述べたいじめのケースなど、断る力、訴える力、すなわちそこに「独りぼっちになってもいい」という強い意志の力があれば、克服できることもあると著者自身は考える。

またジェラットの意思決定理論は、キャリア意思決定理論の一つで、キャリアに関する客観的・合理的な最終決定に疑問を投げかけ、客観的・合理的方略と主観的・直感的方略の統合を主張するものである（板柳・池場，2004）。そこには、意志の力を最大限に尊重しようとする姿勢がある。さらにアドラー心理学のキーコンセプトである勇気づけは、成果よりも過程を重視しており（野田，1996）、実存主義的アプローチ、ジェラットの意思決定理論同様、意志の力への尊重姿勢を見出すことができる。

このように意志の力には、悪循環を断ち切るための力強いパワーがある。それは自身の信じる道を歩もうとする力強い意志であり、自身のかけがえのない人生を尊重しようとする、若き青年の、魂の叫びのようにも受け止められる。我々は取り戻すことのできない、たった一度の人生を生きている。その人生を無駄にしたくない。意志の力には、そんな力強い願いが込められているような気がする。

### 3. 日本的なやさしさ

ここで述べる日本的なやさしさとは、戦争がなかった時代（縄文時代）に日本人がもっていた思潮体系、言葉を変えるならば先に述べたアニミズムや「円の発想」に裏付けられたやさしさである。著者自身、このやさしさを、詩人吉野弘や金子みすゞの作品、『夕焼け小焼け』や『故郷』（中田，1962）等の日本の唱歌、及び江戸時代末期の僧侶良寛のその生きざま（山崎，1997）の中に見出している。そこからはいずれも、人が自然や古里を愛することによって生じるであろう、穏やかな魂の

温もりが感じ取れる。以下はその傾向が感じ取れた、吉野弘と金子みすゞの詩作品である。

Table 1

石仏 晩秋	吉野弘
うしろで 優雅な、低い話し声がする。 ふりかえると 人はいなくて 温顔の石仏が三体 ふっと 口をつぐんでしまわれた。 秋が余りに静かなので 石仏であることを お忘れになって お話などなさったらしい。 其処だけ不思議なほど明るく 枯草が、こまかく揺れている。	

Table 2

花屋の爺さん	金子みすゞ
花屋の爺さん 花賣りに、 お花は町でみな賣れた。  花屋の爺さん さびしいな、 育てたお花がみな賣れた。  花屋の爺さん 日が暮れりや、 ぽつつり一人で小舎のなか。  花屋の爺さん 夢にみる、 賣つたお花のしやはせを。	

このように各人が、やさしい気持ちを持って物事に接するならば、戦争など起こらないと思うし、地上の全ての物事を敬う気持ちが育まれるであろう。そう振り返るならば、ここで述べたやさしさは、悪循環を断ち切るというよりもむしろ予防的な関わりといえるかもしれない。ただ多くの人がやさしい心を持つことにより、今まで生じていた紛争などの悪循環を回避する（断ち切る）ことができると考えるならば、やはり極めて重要な取り組み（関わり方）といえると思う。また今回、日本的なやさしさを詩や唱歌という形で表現したが、谷川（2000）の「短歌や俳句をたしなんでいる日本人は数百万人を超えている」という指摘や、梅原（1988）の「日

本の思想は理性的思弁より感性的比喩で語られる」という指摘を参考にするならば、これら詩や唱歌を通しての日本的なやさしさの表現は、日本人の性格特性を伝えるのに、極めてすぐれた表現手段といえるのではなかろうか。

#### IV. おわりに

Searles の逆転移から始まり、教育カウンセリングとの関わりの中で、循環について述べてきた。そして悪循環を断ち切る（回避する）ものとしての、気づきと意志、日本的なやさしさの重要性についても記載した。ただここで述べたのは、悪循環を断ち切る（回避する）ものとしての気づきと意志、そして日本的なやさしさであることを確認しておきたい。すなわち循環については、その連鎖に従い過ぎていけば、我々を幸せへ導いてくれるものも多数ある。例としては、Searles が指摘する治療者としての患者の存在（Searles, 1979）や、植物学者 宮脇昭による地球規模での植林活動（一志, 2004）などがあげられる。

また、文中においてカウンセラーにとってのスーパービジョン、教育分析、構成的グループエンカウンターの重要性についても記載した。今後、教育現場に立つカウンセラーの実力向上のためには、それらは欠かせないものであり、今まで以上に人々の認識の高まりを期待したい。

最後に、ますますリサイクルが求められる現代社会において、教師やカウンセラーが循環を意識し、実際の教育現場で児童・生徒・その他教育関係者に接していくことは、そのこと自体「思いやりの心」、言葉を変えれば「私達人間は決して一人で生きているわけではなく、多くの人々、そしてこの大自然のあらゆる物事の中で生かされている」という共生の心を培うことになると思う。それはある意味、人々の言動の一つ一つを尊重する、教師やカウンセラーの基本姿勢に繋がることでもある。そういった観点からも、今後更なる教育カウンセリング場面における循環の研究活動に励みたい。きっとそれは、現代社会のためであると同時に、子供たちが担う未来の社会平和のためでもあると思いつつ。

引用・参考文献

- 安藤治 (2003). 心理療法としての仏教 法蔵館
- 有門秀記 (1999). 不登校・シンナー使用の女子高校生の家族に家族療法を適用した事例研究 学校カウンセリング研究2 1-4
- 傳田健三 (2002). 子どものうつ病 金剛出版 5-28
- Haley, J. (1976). *Problem-solving Therapy*. San Francisco, CA: Jossey-Bass. (佐藤悦子訳 1985 家族療法 川島書店)
- 板柳恒夫・池場望 (2004). キャリア発達 (演習) 日本教育カウンセラー協会 (編) 教育カウンセラー標準テキスト中級編 pp. 126-138
- 一志治夫 (2004). 魂の森を行け 集英社インターナショナル
- 岩田慶治 (1993). アニミズム時代 法蔵館
- 金子みすゞ (1984). 美しい町 新装版 金子みすゞ全集 I JCLA 出版局 174
- 加藤隆 (2002). 一神教の誕生 講談社現代新書 259-289
- 加勇田修士 (2004). 家族・対保護者の問題 日本教育カウンセラー協会 (編) 教育カウンセラー標準テキスト上級編 pp. 170-181
- 岸俊彦 (2004). 意志のある発達心理学 日本教育カウンセラー協会 (編) 教育カウンセラー標準テキスト中級編 pp. 8-13
- 國分久子 (2004). 精神分析理論 日本教育カウンセラー協会 (編) 教育カウンセラー標準テキスト初級編 pp. 36-46
- 國分康孝 (1980). カウンセリングの理論 誠信書房 264-265
- 國分康孝・片野智治 (2001). 構成的グループ・エンカウンター の原理と進め方 誠信書房 49-51
- 國分康孝 (2004). 哲学概論 日本教育カウンセラー協会 (編) 教育カウンセラー標準テキスト上級編 pp. 8-18
- 文部科学省 (2004). 小学校学習指導要領 国立印刷局 91-95
- 諸富祥彦 (2001). 孤独であるためのレッスン NHKブックス 9-12
- 中田喜直編 (1962). こどものうた 野ばら社 p. 80 pp. 168-169
- 野田正彰編 (1996). あの世とこの世 小学館
- 野田俊作 (1996). 続アドラー心理学トーキングセミナー アニマ2001 103-131
- 脳重真作 (1985). いじめはなくせる あけび書房 212-236
- 野崎義行 (1994). 地球温暖化と海 ― 炭素の循環から探る 東京大学出版会 9-10
- 大野裕 (1990). 「うつ」を生かす 星和書店 120-124
- 呉善花 (2001). 縄文思想が世界を変える 麗澤大学出版会
- 小谷津孝明 (2004). 認知療法 日本教育カウンセラー協会 (編) 教育カウンセラー標準テキスト上級編 pp. 49-56
- Searles, H. F. (1959). The Effect to Drive the Other Person Crazy. *British Journal of Medical Psychology*, 32, 1-18 (中井久夫監訳・解説 1984 相手を狂気に追いやる努力 精神の科学別巻 岩波書店 1-37)
- Searles, H. F. (1979). *Countertransference and Related Subjects*. New York, NY: International Universities Press. (松本雅彦他訳 1991 逆転移1 みすず書房 61-152)
- 杉田峰康 (2004). あなたが演じるゲームと脚本 チーム医療 161-167
- 武光誠 (2003). 日本人なら知っておきたい神道 河出書房新社
- 武光誠 (2004). 海から来た日本史 河出書房新社
- 谷川健一 (2000). うたと日本人 講談社現代新書 3
- 千葉千恵美・渡辺俊之 (2004). がんの母親と不登校の娘への家族療法 家族療法研究21(2) 130-137
- 戸沢冬樹 (2002). そして「日本人」が生まれた NHKスペシャル「日本人」プロジェクト(編) 日本人はるかな旅⑤ NHK 出版 pp. 25-89
- 堤利夫 (1973). 生態学講座7巻 陸上植物群落の物質生産 Ib 共立出版
- 梅原猛 (1988). 日本冒険 第一巻 角川書店 1-39
- 梅原猛 (1996). 共生と循環の哲学 小学館 290-315
- 渡辺正雄 (1971). エネルギー保存の法則 伊藤俊太郎 (編) 現代科学思想事典 pp. 66-67
- 渡辺隆 (2004). AD/HDのある子どもの親に対する心理教育的介入 家族療法研究21(3) 230-237

## 60 教育カウンセリング場面における循環

- 山崎昇 (1997). 良寛 清水書院
- 吉本伊信 (1965). 内観法 春秋社 13-14
- 吉野弘 (1968). 吉野弘詩集 詩潮社 71-72